

平成21年度
学校改善支援プラン

秋田県検証改善委員会

I 全体的な分析

「知識(A)」と「活用(B)」の3年間の平均正答率からみた状況

小・中学校の国・算・数のA・B、いずれも全国平均を大きく上回り、大変良好であるといえます。

<小学校第6学年>

	H19	H20	H21
国語 A	86.1 (+4.4)	74.4 (+9.0)	75.3 (+5.4)
国語 B	69.0 (+7.0)	62.9 (+12.4)	60.4 (+9.9)
算数 A	88.4 (+6.3)	80.7 (+8.5)	86.2 (+7.5)
算数 B	68.6 (+5.0)	58.9 (+7.3)	63.7 (+8.9)
4項目の合計	312.1 (+22.7)	276.9 (+37.2)	285.6 (+31.7)

<中学校第3学年>

()内の数値は全国比

	H19	H20	H21
国語 A	85.4 (+3.8)	78.6 (+5.0)	82.3 (+5.3)
国語 B	77.0 (+5.0)	66.8 (+6.0)	81.8 (+7.3)
数学 A	77.5 (+5.6)	70.1 (+7.0)	68.8 (+6.1)
数学 B	65.3 (+4.7)	54.7 (+5.5)	63.4 (+6.5)
4項目の合計	305.2 (+19.1)	270.2 (+23.5)	296.3 (+25.2)

成果の要因

- 熱心に前向きに授業に臨む子どもたち
- 自分の考えを書いたり話したりしながら、話し合いや意見交換を深める授業
- 実態に応じた補充的な学習と望ましい家庭学習の習慣
- 学校・家庭・地域の固い連携
- 校内研修及び県市町村の施策・事業など研修システムの充実
- 家庭での望ましい生活習慣

要因につながるデータ

質問紙調査の結果を全国と比較すると、ほとんどの項目で肯定的な回答が多くなっています。特に、次のような項目で安定して高いことが成果の要因といえます。

<児童生徒質問紙>

- ・ 7時前に起きますか (小+15.3、中+17.3)
- ・ 学校の復習をしていますか (小+37.2、中+30.6)
- ・ 地域の行事に参加していますか (小+15.7、中+ 8.5)
- ・ 授業で友だちと話し合う学習 (小+ 5.1、中+19.6)

<学校質問紙>

- ・ 授業中、落ち着いている (小+ 4.8、中+ 6.4)
 - ・ 放課後、補充的な学習サポート (小+12.6、中+16.9)
 - ・ 学校公開日 (小+13.8、中+10.9)
- ※()内の数値はH21の全国比

平均正答率を見ると、復習をしている子どもほどよい成績をとっている。

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
復習する	78.5	63.8	88.3	67.3
復習しない	62.3	47.4	76.2	50.4



復習すると授業がもっとわかるわ



授業が分かりやすいから復習しなくても...

学校や家庭など複数の協力により、次のような成果も表れてきています。

〔成果〕

家庭学習が30分未満の割合が少ない

〔家庭の協力〕

保護者に対して子どもの家庭学習を促す働きかけをよくしている

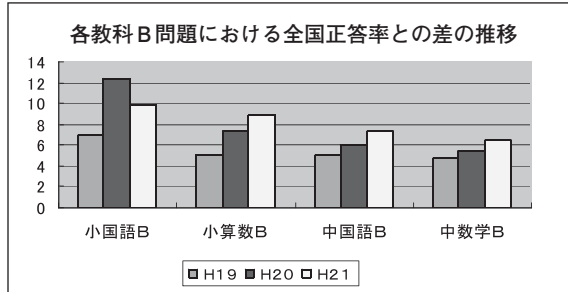
〔学校の取り組み〕

子どもの家庭学習に対して指導や評価を丁寧に行っている

「活用」にかかわる学力の定着について

成 果

「活用」にかかわる問題において
全国平均正答率との差が、年々大きくなっている



課 題

＜国語＞ 伝えたいことを条件に即して明確に書く

			秋田県	(全 国)
H19	中学校B	設問番号 3 三	45.7%	(42.6%)
H20	中学校B	設問番号 1 三	32.2%	(26.5%)
H21	小学校B	設問番号 1 二	22.0%	(17.7%)
H21	小学校B	設問番号 2 二	35.2%	(25.7%)

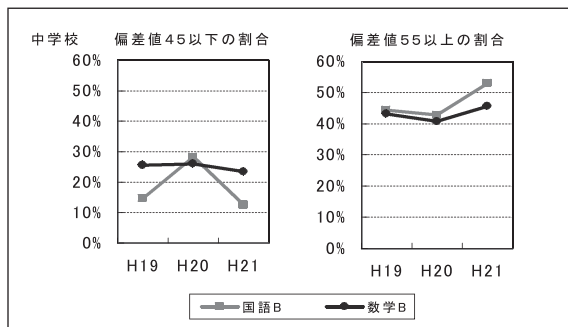
＜算数・数学＞ 事実や方法、理由等を説明する

			秋田県	(全 国)
H19	中学校B	設問番号 5 (3)	46.1%	(38.7%)
H20	中学校B	設問番号 5 (3)	17.9%	(12.5%)
H21	小学校B	設問番号 5 (3)	26.2%	(17.7%)
H21	中学校B	設問番号 3 (3)	26.9%	(19.1%)

中学校での一層の学力向上について

成 果

中学校B問題において
下位層（偏差値 45 以下）の割合が減少し
上位層（偏差値 55 以上）の割合が増加している



課 題

＜中学校で改善したい生徒質問紙項目＞

質 問 項 目	小学校	中学校
自分で計画を立てて勉強する (26)	68.1%	46.2%
苦手の教科の勉強をする (30)	70.8%	63.0%

＜偏差値 45 以下の割合＞

H 21 調 査	小学校	中学校
国 語 A	14.1%	15.4%
国 語 B	11.8%	12.6%
算数・数学A	12.5%	20.7%
算数・数学B	21.5%	23.5%

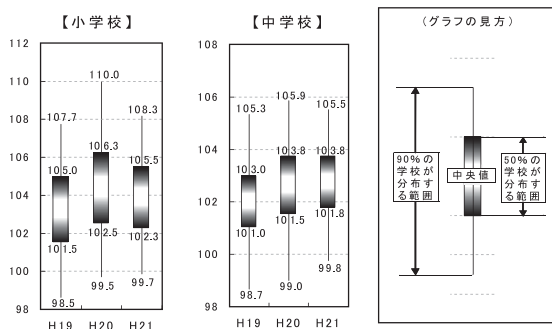
偏差値 45 以下の割合が小学校より中学校の方が多い

地域・学校による格差について

成 果

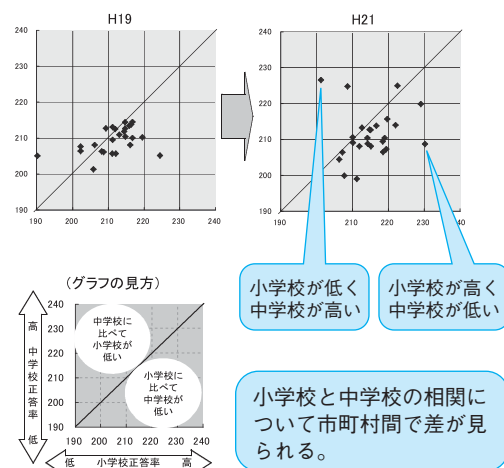
県内の市町村の学力は、全国水準以上になってきており学校による格差も小さくなってきている

標準化得点の合計の分布（学校）



課 題

市町村別の小学校と中学校の相関比較
（4項目偏差値の合計）



※標準化得点・・・平成21年度調査、平成20年度調査及び平成19年度調査の全国の平均正答数がそれぞれ100となるように標準化した場合の得点

Ⅱ 特色ある取り組み

学び合い・かかわり合いを充実させる取り組み

＜A中学校 学級数22＞生徒の心を育て生活を安定させるために、かかわり合う力をはぐくむ学級づくりやかかわりに重点をおいた道徳の時間の充実など、学習の基盤整備に生徒指導の機能を生かすとともに、学び合いを通して確かな学力の定着を目指して取り組んでいます。

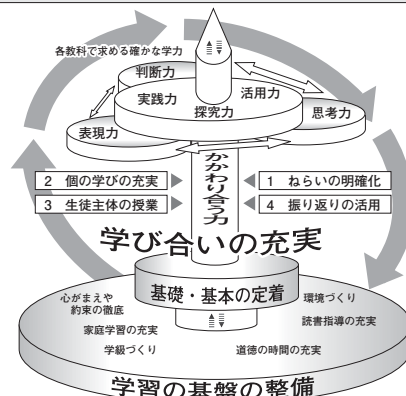
○心を育てて生活の安定、学力の向上を図る

- ・年間を通しての登校指導、生徒への声かけ
- ・適応指導教室の充実（個別指導による学力向上）

○共感的人間関係を生かして「学び合い」の充実

- ・かかわり合う力をはぐくむ学級づくり
→思いやる言葉とかかわり合いの場面の積極的な創出
- ・ねらいを明確にした学び合いの充実
→教科で身に付けさせたい確かな学力の明確化
- ・生徒主体の授業づくり
→生徒が考え、話し、聞き、書き、評価し合う授業
- ・かかわりに重点をおいた道徳の時間の充実
→資料の充実とポートフォリオ形式による実践の蓄積

本校の目指す確かな学力
進んで人や学びとかかわり、意欲的に学習活動に取り組む態度
～ 主体的な学び手 ～



成果 H21全国学力・学習状況調査結果から

()の数値はH19からH21の変化

- ・生活習慣の安定・・・朝食を毎日食べる 96.3%(↑2.1%) 自分で計画を立てて勉強 58.2%(↑8.0%)
- ・規範意識の醸成・・・学校の規則を守る 93.9%(↑10.0%) 困っている人を助ける 79.5%(↑4.2%)
- ・学習意欲の向上・・・家で宿題をする 85.2%(↑5.4%) 数学の勉強は大切だと思う 85.2%(↑8.1%)
- ・学力の向上・・・国語A・B、数学A・Bすべてで県平均・全国平均を上回る

小・中連携に重点を置いた取り組み

小・中併設型(校舎一体型)の例

＜B小学校 学級数7＞9年間を見通した指導や授業づくりの基本軸を決め、どの学年、どの教科であっても共通実践することで、発達の段階に応じた、かつ連続性のある指導が継続・徹底され学力向上が図られています。

○9年間を見通した指導

- ・各教科における重点事項をまとめた「評価の観点と単元」を作成し、9年間で一貫した指導

○共通した授業づくりの視点を設定

- ・ねらい実現のための教材・教具の工夫
- ・学び合い、高め合うための手立ての工夫
- ・活動や考えのよさの評価

どの学年、どの教科でも小・中同じ視点で授業参観し授業改善に役立てている

授業改善

小中共通の授業づくり
小・中学校の教員で算数のコース別学習
授業研究会では、小学校のきめ細やかさと中学校の専門性を生かした協議で授業改善

授業連携

		書	数	理	英
小 4	A			B 通1	
小 5	B			B 通1	B 隔通
小 6	A		B 通1		B 隔通
中 1			B		
中 2					
中 3					

A：中学校教員が小学校で指導
B：小・中教員でT T指導

中学校区における連携の例

＜C中学校(学級数5)と小学校2校＞小学校から中学校への円滑な橋渡しを目的に、地区校長会と教務主任会が中心となり、生徒指導や授業改善などについて研修会を行い、特色を生かした小・中連携を行っています。

連携のための打合せ、研修会

地区校長会・・・総括
教務主任会・・・年間行事等の調整

合同研修会

新入生の近況報告や
生徒の情報交換

研究主任会

研究会での交流
出前授業打ち合わせ
外国語活動のサポート

授業改善の連携

国語と算数・数学の学習状況調査結果を共有・分析し、共通実践事項を設定し授業改善

特色を生かした連携

中学校教員、中学校生徒が小学校へ出前授業



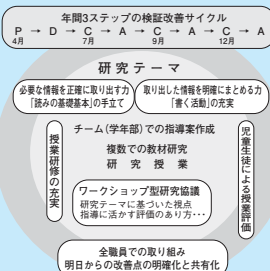
事前検討会を工夫して授業研究を充実させる取り組み

＜D小学校学級数7＞授業研究会を全職員の研究にすため、全教職員で研究テーマとの関連や学習過程などについて事前検討会を行っています。授業研究会後は共通実践事項を確認し、明日の授業につながる工夫をしています。

授業研究の流れ

事前…全職員による授業づくり

検討会①→研究テーマとの関連
ねらい、評価規準等
検討会②→学習活動、板書計画
評価問題等
検討会③→研究推進委員会で再
検討



ワークショップ型授業研究会

協議の視点→事前検討会で焦点
化された課題等
まとめ→共通実践事項の確認

(例) 発問の工夫
中心発問を吹き出し
黒板に記入する
学習の約束の徹底
学習の約束を教室掲示するだけでなく、
家庭に配付し、保護者にも呼びかける

事後…共通実践事項の継続

＜E中学校 学級数9＞教科を
超えたチーム編成で事前検討会
を行い、授業力向上を目指した
取り組みをしています。

授業研究の流れ

(例) 3教科同時の授業研究会

事前…複数教科で5人ずつ 3チーム編成

・検討会①→研究テーマとの
関連
・検討会②→学習活動や発問、
板書計画等
(生徒目線から)

ワークショップ型授業研究会

・検討会と同チームで生徒の姿を
基にした建設的な意見交換
(教師の同僚性)
・他教科から指導技術の学び合い
・共通実践事項の確認
(例) 学習課題とまとめの整合性

事後…共通実践事項の継続

補充的学習と家庭学習をリンクした取り組み

＜F小学校 学級数7＞全学年において、国語や算数の基礎・基本の
定着や子ども自ら主体的に学習に取り組む意欲の向上等を目指すため
に、日課表に補充的学習を位置付け計画的に実践している。補充的
学習との連動及び家庭との連携により、家庭学習の習慣化も図っています。

チャレンジタイム

＜目的＞

- 国語と算数の基礎・基本の定着
(回復指導含む)
- 発展的な内容や活用問題へ挑戦する場の設定
- 主体的に学習に取り組む意欲の向上

＜取り組み＞

- ・全学年週4回実施……帰りの会の前20分間
- ・学級担任以外が担当……学級担任はサポート
- ・事前チェック……学習内容を計画表に
記入
プリント類は自己選択

プリント倉庫の活用

特別教室や廊下の棚にプリント類を保管

全国・県学習状況調査問題、単元評価問題(過去問題含む)、
ワークブック、ローマ字プリント等

いつでも自由にはるプリント倉庫
回復指導や家庭学習にも活用

家庭学習

保護者の理解を得る

- ・趣旨の説明
- ・手引きの配付
- ・時間や内容の確認

家庭学習のてびき

学年のめあて

低学年…毎日机にむかって学習する習慣を身に付け
よう
中学年…学校で学習したことをさらに深めよう
高学年…自分の学習の仕方を身に付けよう

みんなのやくとく

- ①自分から進んで静かなところで学習しよう。
- ②学習する時間を決めよう。(10分×学年)

お休みの日
時 分～時 分

学習する場所を決めよう。

- ③家庭学習ノートには、日付・始めた時刻・終わった時刻・学習内
容・ふりかえりを書きましょう。
- ④学習のメニューをヒントにどんな学習をするか決めていきま
しょう。チャレンジタイムに準備をしているプリント類も活
用できます。
- ⑤答え合わせのできるものは、答え合わせをしてみよう。
- ⑥困った時は、担任の先生に相談をさせてもらいましょう。

＜G小学校＞

効果的な家庭学習の方
法を他から学べるこん
な工夫も有効です！

リレーノート

家庭学習ノートを学級や
生活班で回して活用する。

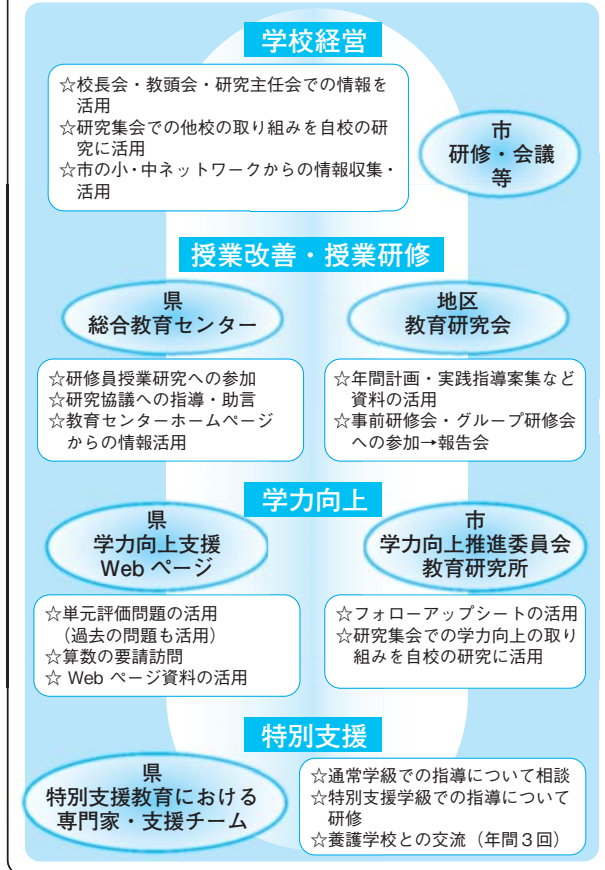
他の友達の家庭学習の仕
方や内容の良いところを
参考

友達のノートを見て、学
んで、感じて、工夫する。

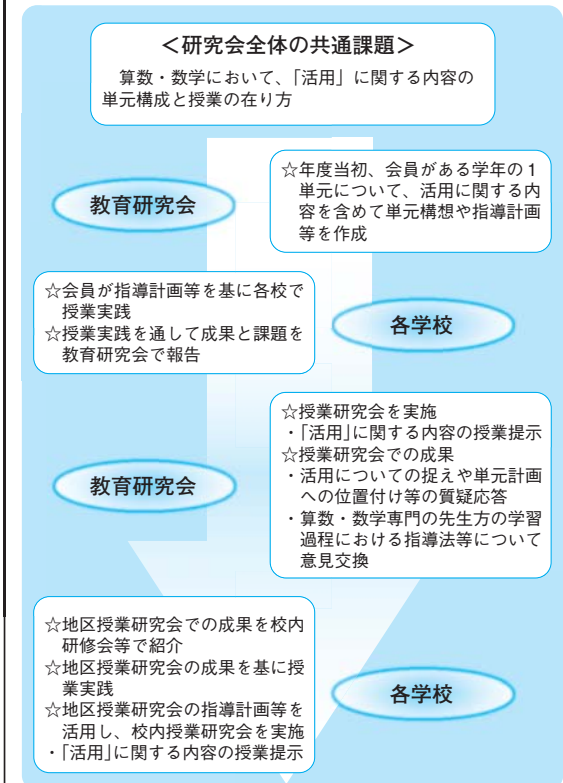
- ・家庭学習の仕方や友達がど
れくらい頑張っているのか
分かるし参考になります。
(小6 児童)
- ・友達の家庭学習のよさを話
し合い、これからどのよう
に勉強していくか会話が増
えました。(保護者)
- ・ノートをリレーしないとい
けないので責任感ができ
ました。(保護者)

ネットワークを活用した学力向上の取り組み

<H小学校 学級数7> 自校の課題を解決するために、多方面とのネットワークを利用して情報収集し、課題改善に活用しています。



地区教育研究会員が研究会全体の課題解決について話し合い、そこで提案された指導計画等にしたい授業実践を積み重ね、さらに授業研究会を行い成果と課題を共有しています。



トピックス

大分県の先生方から見た県内小・中学校のよさ

学力向上対策先進地研修のため、大分県から50名以上の先生方が本県を訪問し、11月に県内3地区の小・中学校を訪問しました。秋田県では当たり前になっている取り組みが、他県の先生方の目には特徴ある取り組みとなって映っているようです。

◎県教育委員会—市町村教育委員会—学校が組織的

・学力向上に対する県教育委員会の取り組みに具体的な手立てがあり、それに対して市町村教育委員会や学校が一体となって取り組んでいる。特に全国学力・学習状況調査と県学習状況調査がPDCAサイクルとなって活用されており、一つのことに重点を置き取り組む一点主義を貫いている。

◎教職員が同じベクトルを向き共通実践

・各学年で子ども主体の授業を意識しており、学習規律や発表話型など子どもたちに力を付けるための「基本形」が徹底している。板書計画に基づき、授業内容が分かり、振り返りができるノート指導を行うなど、組織的に授業実践している。

◎「当たり前のことを積み重ねる」ことで子どもたちに自信

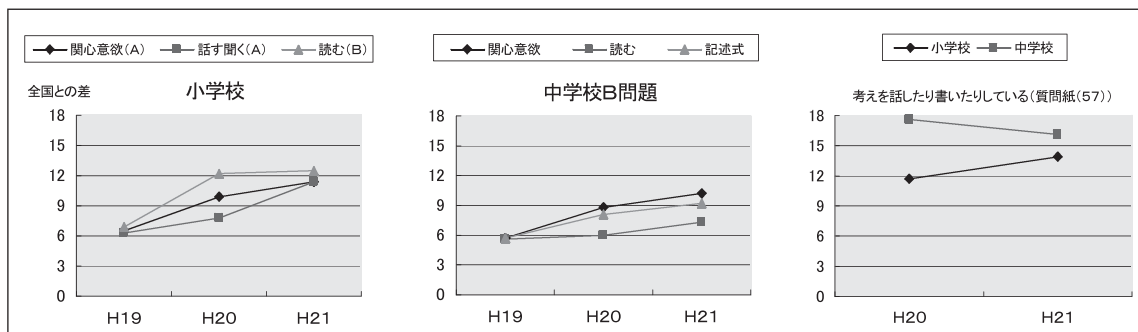
・子どもたちは自信に溢れて生活しており、一人一人が生かされている。そこにあるのは豊かな学校教育の営みであり、その使命を果たすために、教師としてやるべきことを淡々と実践している。これが秋田県の教育のすばらしさだと感じた。

Ⅲ 各教科の分析

(1) 3年間を通しての成果

国 語

- ・ 小・中学校の各領域で、全国水準を上回っている。特に、国語への関心・意欲・態度(小・中)、読むこと(小・中)、小学校における「話すこと・聞くこと」について、年度を追うごとに、**全国との差が大きくなっている。**
- ・ 主に「書く能力」「読む能力」が問われる**記述式の問題**について、中学校のB問題で、**全国との差が大きくなっている。**
- ・ **話し合いや意見交換**をする学習活動が充実し、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたり」している児童生徒が多い。

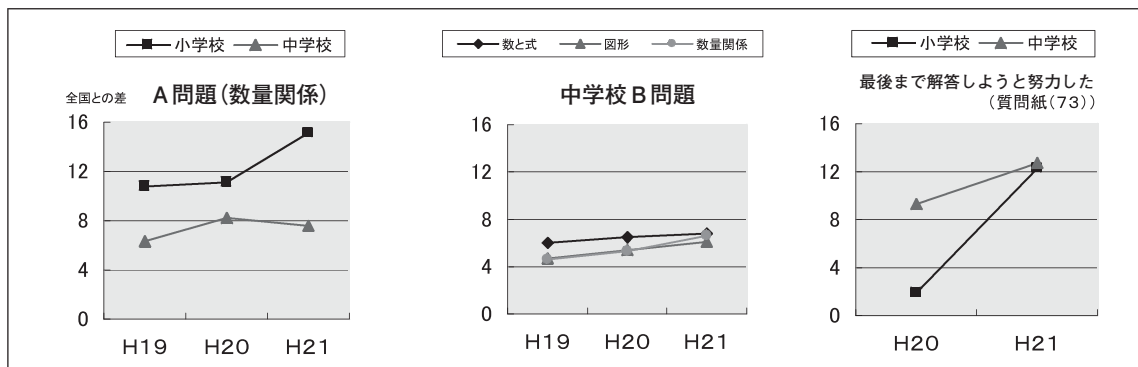


<今後の課題>

- ・ 文章に述べられている意見に対して自分の考えをもち、それを話したり書いたりする力に課題がある。二つの意見を比べたり評価したりしながら自分の考えをもつことを一層重視していく必要がある。
- ・ 目的や条件に応じて考えを書く力に課題がある。
 小学校→目的に応じて資料を活用し、伝えたいことを明確にして書くこと
 中学校→書き手の意図をとらえて読み取ったことを条件に応じて書くこと

算数・数学

- ・ 小・中学校の各領域で、全国水準を上回っている。特に、A問題では「数量関係」、B問題では、**中学校において大きな伸びが見られる。**
- ・ 「**実生活における事象との関連を図った授業**」や「**ねばり強く問題に取り組む児童生徒**」の割合が、全国平均を大きく上回っている。



<今後の課題>

- ・ 情報を整理、解釈して、それを基に筋道立てて説明する問題に課題がある。
- ・ 資料を活用して、適切に判断したり、理由を説明したりする問題に課題がある。
 小学校→グラフを基に、割合を求めたり、用いたりすること
 中学校→目的に応じて等式を変形することや証明の意義に関すること

(2) 授業改善の視点

国 語

【例1】 目的に応じ、資料を活用して書く力を付けるために

〔1単位時間における指導例〕（小学校第1学年）〈教材名：どうぶつの赤ちゃん（光村図書）〉

本時のねらい ・ 紹介文を書くために、自分の選んだ本から必要な事柄を観点に沿って集めることができる。

〈指導のポイント〉

- ・ 文章全体を読んで、目的に応じて情報を取捨選択する学習活動を、低学年から取り入れる。
- ・ 「書くこと」のプロセスに沿った推敲や評価の仕方を身に付けさせる。

児 童 の 思 い

・ 「体の大きさ」「目や耳の大きさ」のことは選べばいいだね。

・ 前に勉強したように、順序を表す言葉を見付けると分かりやすいね。「生まれてすぐの」「もっと大きくなると」とあるから……。

・ そうか！この紹介文には、育っていく様子を書くのだから、僕のものには□□のことより◇◇のことを入れた方がいいんだ！

学 習 活 動

学習課題

〇〇の赤ちゃんのうまれたばかりのようすと、大きくなっていくようすをほんから見つけよう。

- 1 必要な事柄の見付け方を確かめる。
- 2 読書タイムに自分の選んだ本を読み返し、紹介文に必要な事柄を見付けて付箋をはる。
- 3 同じ動物の本を選んだ友達とペアになり、見付けた事柄を確かめる。
- 4 発表してよさを確認し合う。
- 5 本時の振り返りをし、次時の見通しをもつ。

留 意 点

◎ 取捨選択の意識を高める。

- ・ 情報選択の観点を児童自身に気付かせる。
- ・ 目的に応じて情報を取捨選択することの意味を、モデルから学ばせる。

◎ 分類による情報の取り出し方を身に付けさせる。

- ・ 付箋の色分けや必要な事柄をメモすることによって、情報が取り出しやすくなることに気付かせる。

◎ 推敲や評価のポイントを明確にする。

- ・ 目的に応じているかを視念に、互いの選材の仕方を吟味させる。

【例2】 書き手の意図について読み取ったことを生かし、条件に応じて書く力を付けるために

〔単元全体を通した指導例〕（中学校第3学年）〈単元名：新聞の特徴を生かして書こう〉

単元のねらい ・ 身近な話題から適切な題材を選び、読み手に伝えたいことを明確にし、紙面構成を工夫して記事を書くことができる。

〈指導のポイント〉

- ・ 身近な新聞記事などを活用した具体的な言語活動を取り入れることにより、社会生活に生きる国語の学習になるようにする。
- ・ 「読むこと」と「書くこと」の関連を図り、目的や条件に応じた表現の仕方を身に付けさせる。

生 徒 の 思 い

・ あのととき学習した読み方で、構成を比べてみよう。
・ だから事実の取り上げ方が違うのか。自分が前に書いた新聞は……。

・ 読み手は自分と同じ中学生だから、あのデータが必要だな。
・ □□ということ伝えるためには、スペースのことも考えると、リードと見出しは……。

・ なるほど。〇〇さんは、字数の条件を考えて、この情報を選んだのか。自分の選び方は……。

学習活動（6時間）

- 1 新聞の紙面構成の特徴を知る。 (第1時)
- 2 二つの報道記事を比べて、書き手の編集意図をとらえる。 (第2時)
- 3 新聞の題材を探し、編集意図を明確にして構成を考える。 (第3時)
- 4 編集意図が読み手に伝わるように見出しやリード文などを工夫して新聞記事を書く。 (第4～5時)
- 5 相互評価をする。 (第6時)

留 意 点

◎ 「読むこと」の既習事項を生かす。

- ・ 構成や表現の効果をとらえることにより、書き手の意図が異なる編集の仕方に表れてくることに気付かせる。

◎ 取材・構成は、相手意識・目的意識・条件意識に基づく。

- ・ 編集意図が「見出し」「リード文」「本文」等の字数や内容等の条件に反映されることを踏まえさせる。

◎ 推敲や評価は、観点を明確にし、過程を重視する。

- ・ 単なる誤字や脱字のチェックではなく、意図と構成、条件と内容の関係について具体的に相互評価させる。

算数・数学

【例1】割合の意味と求め方（小学校第5学年）

本時のねらい 割合を用いる場面とその意味、割合の求め方を理解することができる。

〈指導のポイント〉

- ・問題文から必要な情報（基準量・比較量）を取り出し、比較の仕方を明確にする。
- ・数直線図などを用いて、基準量・比較量・割合の関係を明らかにさせる。

児童の気付きや考え

- ・Aチームがいちばん勝っているね。
- ・Bチームがいちばん負けていないよ。
- ・Cチームの負けた数はBチームの2倍だ。

- ・Aチームの試合数を1と見て勝ち数の割合を考えると・・・。
- ・数直線図に表して考えるとよく分かるんじゃないか。

- ・試合数が違う場合は、それぞれの試合数を1と見て、勝ち数の割合で比べると分かります。

学 習 活 動

1 問題を把握し、課題を焦点化する。

〔問題〕 何チームかで野球のリーグ戦をしています。次の3チームの中で、いちばん強いのは、どのチームと言えるでしょう。（引き分けはなし。）

	勝	負
Aチーム	13	7
Bチーム	7	3
Cチーム	9	6

試合数が違う場合、どのようにして強いチームを決めたらよいか。

2 強いチームの決め方を考える。

- ① 3チームの試合数をそろえたときの（例えば60試合）勝ち数を比べる。
- ② 3チームそれぞれの試合数を1と見たときの勝ち数の割合を比べる。（数直線図などを用いて、基準量、比較量、割合の関係を可視化）

3 理由を明らかにして、答えを確かめる。

4 別の場面に適用する。

5 割合を用いる場面とその意味、割合の求め方をまとめる。

6 評価問題に取り組む。

留 意 点

◎ 答えを問うのではなく、理由を問う。

- ・「どのチームがいちばん強いのか」「なぜそのチームが強いと言えるのか」という発問により、「強い」と言える判断の基準を明確にさせる。

◎ 既習との関連を踏まえ、価値付けをする。

- ・既習の「倍を求める」時の考えが活用されていることや簡便性、一般性の視点などから、②の方がよりよい方法であることを明らかにする。

◎ 見方や考え方のよさを感じ得させる。

- ・例えば、DチームやEチームの勝敗表を提示するなどして場面や条件を変えても適用できることを体験させ、割合を用いるよさや有用性を感じ得させる。

【例2】証明の意義（中学校第2学年）

本時のねらい 証明の必要性和意味を理解することができる。

〈指導のポイント〉

- ・一般性や普遍性を保証する観点から、演繹的な推論の必要性に気付かせる。

児童の気付きや考え

- ・小学校の時は、角度を測ったり切ったりして調べたぞ。どんな三角形でも成り立つと思うけど・・・。

- ・平行線の性質を使うと小学校で角度を並べたときと同じ形になるぞ。

- ・どんな三角形でも成り立つことを説明する場合は、平行線の性質などを根拠として説明しないといけないんだ。

学 習 活 動

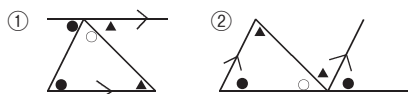
1 問題場면을提示する。

〔問題〕 「どんな三角形でも内角の和は 180° である。」
ということは、本当なのか。

2 言える理由を考え、課題を見いだす。

どんな三角形でも必ず成り立つことを、どのように説明したらよいか。

3 演繹的な推論によって説明する方法を考える。



4 証明の意義とその意味をまとめる。

5 証明を振り返り、新たな性質を見いだす。

三角形の外角は、それととなり合わない2つの内角の和に等しい。（②から）

6 評価問題に取り組む。

留 意 点

◎ 生徒に図をかく習慣を付けさせる。

- ・安易にシートに頼らず、題意を読み取り（聴き取り）、必要な図は自分でかく習慣を日常的に付けさせる。ここでは、任意の三角形をノートにかかせる。

◎ 単なる「論証指導」にしない。

- ・観察、操作や実験などによる説明と証明とを比較し、証明の必要性和意味について理解を深めさせる。

◎ 新たな性質に目を向けさせる。

- ・証明の過程で現れた事実や得られた結論に着目し、新たな性質が見付けられないか考える機会をもつ。

Ⅳ 提 言（委員長による提言）

① 学校への提言

(1) 授業改善のための「専門職」としての研修・研究の充実

秋田県が3年連続トップクラスの成績を達成することができたのは、先生方の指導力の高さである。質の高い学習課題の提示、切れ味のある発問や助言・説明、効果的な評価、そして子どもの思考を促し発言を引き出しそれを関わらせながら発見を導き出していく学び合いの指導——など、県内の多くの地域で質の高い授業が展開されている。それはレベルの高い先生方の「共同研究体制」が秋田県にはあることによって大きく支えられている。

しかし、残念ながら研究授業で担当の先生だけが孤立無援で奮闘するという例がないわけではない。当日の検討会も、授業を賞賛し合うだけで終わってしまう場合もある。

授業研究では、事前の準備段階からの実質的な共同研究が重要である。チームで教材選択、教材研究、指導過程作成、授業案作り等を共同で行っていく。その過程が研究として大きな意味をもつ。授業研究当日も、たとえば付箋紙などを使い成果と課題を出し合い、その後それを生かしながらワークショップ的に検討を深めていくなどの方法も有効である。事後研究は、授業映像を見返し一時停止しつつ秒単位で丁寧なりフレクトをすることが効果的である。そのためにも授業のビデオ撮影は必須と言える。

授業研究をより有効なものとするためには、教科を超えた共同研究が是非必要である。特に中学校では「教科の壁」が大きく立ちはだかる。教科の専門性を尊重しつつも、教科を超えた授業研究チームを作ることによってそれを乗り越えることができる。それによってより有効な授業研究が展開できる。「異質性」「対話性」が授業研究の質を高める。

できる限り学校外の教師を招き入れる努力も必要である。たとえば指導主事や大学教員に事前準備の段階から関わることを要請する。小・中の壁を超えて関わりあうことも有効である。県内の研究会、東北地区の研究会、全国規模での研究会等への参加も大切である。

そのような授業研究の高まりの中で、日常的な共同研究が自然に行われるようになる。

(2) 補習・家庭学習指導に関する校内の協力体制の整備

秋田県では、補習そして家庭学習への指導がたいへんきめ細かい。そのことも3年連続トップクラスの成績達成に大きく貢献している。しかし、先生方は補習や家庭学習の指導を多忙な中で行っている。中学校では、特定の教科の先生方に負担が集中してしまうこともある。それを解決するためには、教師の多忙化の解消や教員加配が必要なのだが、校内の協力体制によってある程度まで負担軽減は可能である。ある学校では、校長・教頭・教務主任等、学年部以外の先生方が、交代で補習を担当するという体制をとっている。また、当該教科以外の先生方も、交代で補習を担当するという体制をとっている学校もある。

家庭学習指導についても、課題の出し方、赤ペンの入れ方、家庭学習ノートの指導方法、効果的な課題プリントの作成方法、家庭学習が習慣化できていない子どもへの指導の方法等を、相互に共有しあっている学校も少なくない。また、家庭学習の習慣化を、担任だけでなく、学年主任、教頭等がチームで指導している学校も少なくない。

校内協力体制の整備により効率的でより質の高い補習、家庭学習指導を実現してほしい。

② 市町村教育委員会への提言

(1) 学校を超えた様々な共同研究体制の構築

市町村教育委員会の様々な指導・援助・取り組みにより、県内小・中学校の授業改善はたいへんよい形で進んでいる。それが秋田県の3年連続トップクラスの成績につながっている。

ただし、授業改善の取り組みを、さらに広げ高めていく試みも今後必要と考える。まず、授業改善のための共同研究が十分に機能していない学校への指導主事等による援助、複数の小学校や複数の中学校での合同研究、小学校と中学校の合同研究（小・中連携）の推進などである。たとえば、小・中連携は小・中相互に先生方が得るものが多い。小学校の先生方は、中学校の各教科の先生方の専門性から学ぶことができるし、中学校の先生方は、小学校の先生方の指導のきめ細かさから学ぶことが多い。最近では、小・中の先生方が教科を超えて授業研究チームを作り、事前準備の段階から共同で研究を進めている例もある。

(2) 補習・家庭学習等に関する市町村としての支援体制

①でも述べたとおり、先生方は忙しい中、様々な工夫をしながら補習そして家庭学習指導を丁寧に行っている。しかし、限界もある。市町村教育委員会としては可能な限り、補習のための加配を措置してほしい。また、家庭学習については、市町村教育委員会として「家庭学習パンフレット」を作成するなど、できる限り各学校の指導を援助してほしい。

また、特に中学校においては、部活動の指導で先生方がかなりの加重負担を強いられている。外部指導者を雇用するなどして、先生方の負担を大幅に軽減してほしい。このままでは、「専門職」としての専門性を保つことが難しい状況になっている地域もある。

③ 県教育委員会への提言

(1) 成果を上げている施策・取り組みの一層の充実

秋田県が3年連続でトップクラスの成績を達成することができたのは、先生方の指導力の高さであるが、それをリードしてきたのが県教育委員会及び市町村教育委員会である。

これまで県教育委員会が取り組んできた様々な施策・取り組みは、継続して進めていってほしい。指導主事が県内各地で手厚い指導・支援を行っていることは大きな意味をもっている。指導主事の指導力は、全国的に見てもたいへん高い。

また、学校・家庭・地域の連携についても、県教育委員会が重視し「地域に学校を開く」ことを強く推奨していることが貢献している。総合教育センターの研修の充実、HP等による学習支援なども有効に機能している。

(2) 「専門職」としての教師の研修・研究体制の条件整備

上記(1)の施策・取り組みによって秋田の先生方は、質の高い指導力を身につけてきている。しかし、上記①で触れたようにまだ十分とは言えない研修体制の学校及び地域も存在する。小学校ではリーダー不在のため、十分な研修ができない例、中学校では「教科の壁」が障害となって十分な研修ができない例などがある。県教育委員会のより手厚い指導・援助によってこれらを改善していってほしい。

また、研修をしたいという意味はあっても、放課後の時間等を十分確保できないという地域もある。②でも指摘したが、特に中学校においては、部活動の指導で先生方がかなりの負担を強いられている。そのため、「専門職」としての専門性を保つことが難しい状況になっている学校及び地域もある。これについては、外部指導者を雇用するなどして早急に改善する必要がある。

また、先生方が事務的な職務で子どもたちと関わる時間がなくなりつつあるという状況にも目を向けてほしい。事務的な仕事については、出来る限りスリム化に向けて改善をお願いしたい。

(3) 学力格差の解消に向けての施策・取り組みの充実

秋田県は3年連続でよい結果を達成できたとは言え、一方では地域による学力格差もまだ存在する。その地域に対する手厚い施策をお願いしたい。

特に、結果が良好でなかった学校及び地域には、補習のための「学力加配」を措置してほしい。それにより状況が好転することは間違いない。また、県教育委員会及び市町村教育委員会の指導主事による重点的な授業改善等の指導・援助もお願いしたい。さらに教育専門監を増員しこれらの地域に重点的に派遣してほしい。

30人程度の学級編成を小1・小2、中1から全学年に早急に広げることを求めたい。それにより、県内格差が解消されるだけでなく、秋田県全体の学力レベルがさらに上がることは間違いない。1学級の人数の少なさと、全国学力・学習状況調査の結果との間には、明らかに相関がある。

学校統廃合を経済原理だけで機械的に行わないこと、10年後の教師の大量退職を見通した計画的教師採用（新採の増員）の実施についても、ぜひ配慮をお願いしたい。

本県の小・中学校のよさを生かしさらに充実・発展するために

検証改善委員会では3年間のデータを基に、「安定した取り組みをしている学校」「課題の改善状況が顕著である学校」がどのような特徴をもっているかを調べました。その結果、学力を支える関連因子がいくつかみつかりましたので、それらを5つの重要な特質としてまとめました。本県がもつ「強み」を最大限生かし一層充実させるといふ点から、今回、検証改善委員会が提案する「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校～5つのエッセンス～」を各学校において参考にいただければ幸いです。

一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～ 5つのエッセンス ～

一 学校体制でPDCAサイクルの確立

毎年、効果のある取り組みを進めている学校では、個々の教職員の力量頼みではなく、組織として検証改善のシステムが確立されています。例えば、「教育目標やその達成に向けた方策について共通理解が図られている」「全国調査等の問題及び結果等を全校体制で活用する」などの調査項目で、本県は全国を大きく上回っています。PDCAサイクルを確立しつつ、教職員の共同研究・共同検討を大切にしていることがわかります。

二 子どもたちが積極的に授業に参加できる学校空間

学校質問紙では「熱意をもって勉強している」「授業中の私語が少なく落ち着いている」「礼儀正しい」などが全国を大きく上回ります。また、児童・生徒質問紙でも「難しいことでも挑戦する」「自分にはよいところがある」などが全国よりもよい結果です。本県の子どもの前向きで真摯な姿勢が浮かび上がってきます。これは、教師や学年・学校での丁寧な生徒指導や授業づくりが生み出した成果です。

三 子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、子どもたちが自ら考えることを大切にする授業が多く行われています。また、それをグループで話し合ったり、学級全体で意見交換をさせたりする授業も盛んです。「自分の考えを発表する」「よく話し合う」「グループで調べる」などが全国を大きく上回ります。ただし、子どもの思考を促し、相互に深めさせていく授業では、教師の高い指導力が求められます。そのためにも、教師相互の質の高い共同研究が大切です。

四 自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、家庭学習の充実、朝・昼・放課後等での補充的学習の取り組みを大切にすることが必要です。それも、教師待ちでない自発的な学習を促す指導が大切です。本県では、「授業の復習を家でする」「自分で計画を立てて学習する」などが全国を大きく上回ります。今後さらなる学力向上を期して家庭学習充実のための指導、補充的学習の取り組み、課題の与え方等を、学校の体制として継続的に取り組むことが求められます。

五 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

家庭と地域が、強く学校を支持してくれていることが、本県の教育の強みです。子どもたちの授業への姿勢、家庭学習の充実なども、それとかわかりがあります。本県では「ハロースクール&ほっとエリア運動」を進めてきた結果、「授業公開など学校公開日を設けている」「学力調査結果を保護者や地域の人に説明した」などが全国を大きく上回っています。保護者が地域の人たちが学校の教育活動に参加している学校ほど、学力が高いという傾向も見られます。学校・家庭・地域の連携が豊かな教育力を生み出します。

平成21年度秋田県検証改善委員会委員等一覧（敬称略）

阿部 昇（秋田大学教育文化学部教授）
耳塚 寛明（お茶の水女子大学理事・副学長）
須藤 幸紀（参事（兼）義務教育課長）
澤井 康孝（総合教育センター副所長）
藤田 良博（能代市教育委員会学校教育課長）
三條 正弘（秋田市教育研究所長）
富樫 武彦（大仙市教育研究所長）
田仲 誠祐（義務教育課副主幹）
千田 寿彦（義務教育課副主幹）
武藤 基（義務教育課主任指導主事）
佐藤 俊之（義務教育課主任指導主事）

六郷 博志（総合教育センター主任指導主事）
武藤 正則（総合教育センター主任指導主事）
嵯峨 康弘（総合教育センター指導主事）
小山 昌岐（総合教育センター指導主事）
鶯谷 真一（総合教育センター指導主事）
中井 淳（北教育事務所鹿角出張所指導主事）
木村百合子（南教育事務所指導主事）
高橋 保志（南教育事務所雄勝出張所指導主事）
太田 博史（義務教育課指導主事）
庫山 徹（義務教育課指導主事）
土倉 新也（義務教育課指導主事）